

羽倉さんと3Dフォーラム

石川 洵

羽倉さんの訃報に接し4か月が経ちましたが、まだ3Dフォーラムの研究会がある度に、羽倉さんが突然会場のドアを開けて、軽く手を挙げて「やあ」と言って現れそうな気がしてなりません。

羽倉さんを一言で形容するなら、第一級のコーディネーターでしょうか。

初めてお会いしたのは、3Dフォーラムの設立準備をされていた頃、初代会長の濱崎先生を交え「会の名前をどうしましょうか」といった相談をされていたのを横で聞かせていただいていた。

以来、勤勉な会員でもないため年2回位の出席ながら、バラエティに富んだ3Dフォーラムの発表をいつも楽しみに聞かせていただいています。

考えればずいぶんと長い年月が流れてきたことになります。

羽倉さんは、時折ポツリと、「次はこんなテーマで研究会をやってみたいのだが」と話されることがありました。

大丈夫かな、集まるかな、と心配していると、当日には沢山の新しい発表が集まり立派な研究会になっています。

きっと、要請されると、だれしも「これは一肌脱がねば」と協力したくなるような力を羽倉さんは持って居られたのでしょう。私も数回要請を受けましたが、私で大丈夫ですか、と言うといつも「もちろん」と言葉で背中を押してくれました。

そのほか、羽倉さんには、3Dフォーラムを離れても、MITのベントン博士の来日時の歓迎行事を企画して下さるなど楽しい思い出が一杯です。

私欲なく裏方に徹するその姿勢は、まさにコーディネーターの鑑だと思います。

数年前羽倉さんは、「80歳までのロードマップを描き3Dの発展に努めて行く」といった趣旨の話をされていた。

志半ばで逝去されたことは誠に残念で、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

そして、私たちが、3D映像技術を一步でも先に進めて行くことが一番の供養になるのではと思っています。

2017年3月